

身近なまちの風景物語(26)

快適な一新

目の前の車列が流れる。まだか、まだかと時計を見て、時刻表を何度も確認する。雨、雪、風、そして炎天下では、立ったままではつらい。右方向に目を向け、バスが来るのを待ちわびる。何とかならないかなと思いつつ、鉄道駅とは違う、と心を落ち着かせる。

大都市でよく見かけるバスシェルのバス停を、地方都市でも見かける機会が増えてきた。

それまでのバス停は、停留所名と時刻表が掲示されているだけだった。あっても雨除け・日除けの屋根が心細くあるくらいだ。バス停には照明がなく、夜間は道路の街灯頼みだった。

雨には傘が必要で、冬の風は吹きすさぶ。まわりに家屋や店舗がなければ、夜間の足下は暗い。辛抱強く、また不安を抱えながら、ひたすらバスを待った。

それに対し、広告事業者などがバス停をリニューアルする取り組みが都市部を中心に進んでいる。事業者はバス事業者や警察などと協議し、新しいバスシェルターを整備する。

屋根と壁面が雨や風を防いでくれる。座ることに躊躇

しないベンチがあり、照明や防犯カメラも設置されている。バスを待つ環境として安全、安心はもとより、快適さが増す。

壁面には企業の広告が掲出されている。バスシェルの設置事業者が、この広告料収入を、整備費用と清掃を含む維持管理費に充当するビジネスモデルである。

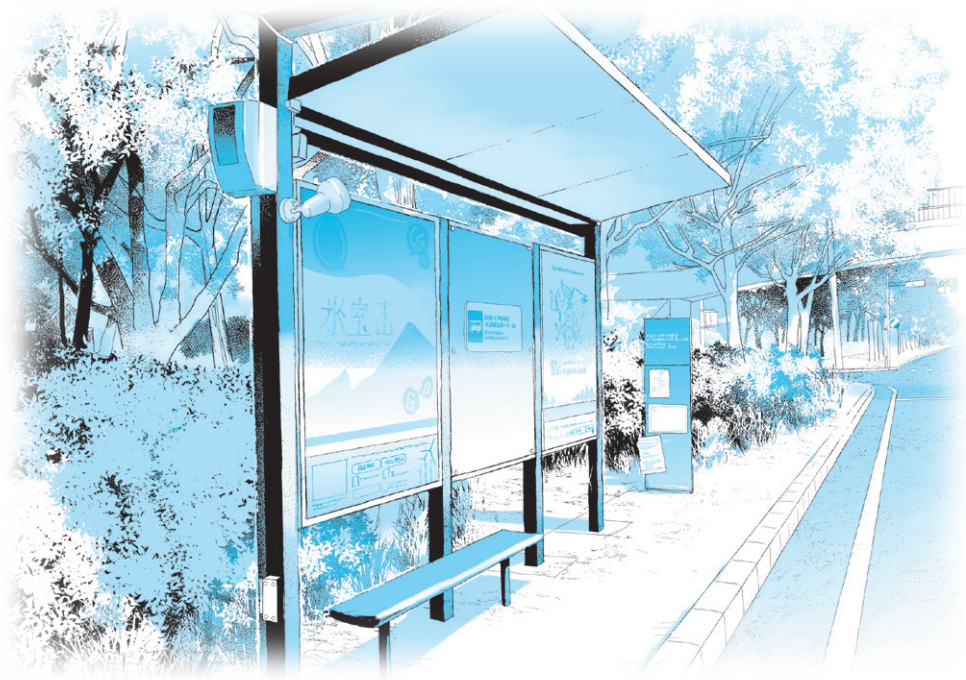
もとは仏国の屋外広告事業者がはじめ、世界各地でこのモデルが展開されている。わが国では2003年に国土交通省がバス停に関する規制緩和の通達を出したことで可能になった。

ただしどのバス停でもこれに置き換わるわけではない。企業からの広告需要があること、すなわち一定の乗降客が見込めるバス停である必要がある。さらに設置に際しては、歩行者などの通行の妨げにならない場所であることも必要だ。

とはいえ、ひとたびできると、それまでの淀んだ気持ちから開放される。バスを待つ時間の心が晴れる。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程1年）